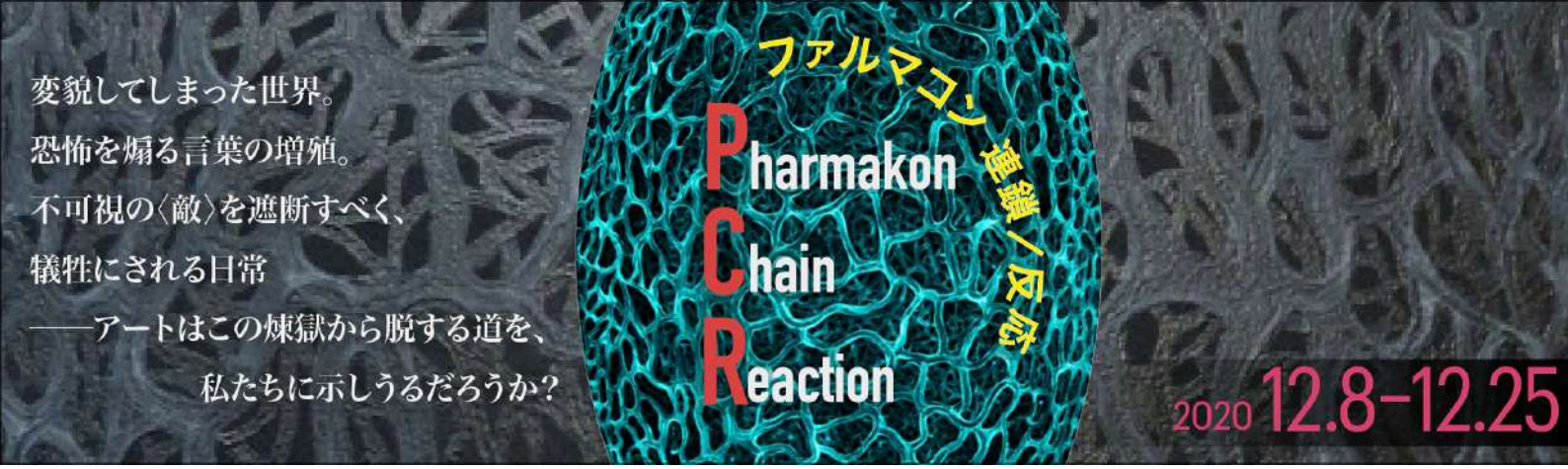


プレスリリース vers.1
2020.10.24

展覧会 ：Pharmakon Chain Reaction （「ファルマコン―連鎖／反応」）

会期：2020 年 12 月 8 日～12 月 25 日　月曜休、火水木日 12 時～19 時、金土 12 時～20 時

オープニングパーティ：2020 年 12 月 8 日 16 時～20 時

シンポジウム：2020 年 12 月 19 日 14 時～18 時

会場：アトリエみつしま　603-8215　京都市北区紫野下門前町４４
（地下鉄烏丸線「北大路」駅から徒歩 15 分、市バス「大徳寺前」から徒歩 5 分）

参加作家：エルイーズ・イルベール、入江早耶、大久保美紀、加藤有希子×児玉幸子、フロリアン・ガデン、ジェレミー・セガール、谷原菜摘子、堀園実、福島陽子、古市牧子

キュレータ：大久保美紀

主催：吉岡洋・大久保美紀

共催：アトリエみつしま

展覧会概要

世界は新型コロナウイルス感染による未曾有の状況が続いている。社会に蔓延する感染の不安や恐怖を煽る言説により、ウイルスの存在はあたかも人類にとっての「敵」「侵入者」「テロリスト」として認識されている。私たちは、自己防衛のためウイルスを絶対的に遮断しようと他者との接触を徹底的に避け、生活を犠牲にし、日常はすっかり変容した。ソーシャル・ディスタンス、新たな枠組み。煽動された恐怖は連鎖反応を起こし、さらなる恐怖を生む。私たちは見えない敵を前に文字通り震撼し、途方に暮れる。
だが、生命の注目すべき挙動の一つに、細胞の自死として知られるアポトーシスや一部の免疫反応など、それが一見正反対に見える活動を同時に行って平衡を保つという営みがある。そもそも生命体は膜によって自己と外界を区別すると同時に、膜に空いた多数の孔を通じて外界との物質や情報のやり取りするおかげで生存している。ある個体とは、他の生命体と複雑な関係性（あるいは連鎖）の中に存在するのであり、そのことは生存時も死後も変わらない。このような生命の本質を無視し、ウイルスを撲滅すべき敵として完全な衛生を目指す思考は不可能であるばかりか危険ではないだろうか。
本展覧会「ファルマコン：連鎖／反応」では、今日の私たちの身体が置かれた状況―「毒を一方的に排除する志向」―を問題視する。薬と毒という両義的意味を持つ「ファルマコン」の概念は、物事がしばしば持っている両面性（陰と陽、毒と薬、メリットとデメリット、効用と副作用、さまざまな言葉で言い表される「ある側面」と「それと補完的である側面」に着目する。私たちが「毒」とみなす存在を根本的に排除しようとするとき、私たちは世界が相反するものの均衡で成り立ち、それらが単に調和するだけでなく時には複雑に絡み合って全体を形作っているという事実を忘れ、そのことにより自らを生きにくくしている。
ファルマコンの概念に基づく芸術的アプローチを通じて世界を再考することによって、生命をより直感的に捉え直すことができるだろうか。

大久保美紀（キュレータ）

展覧会の見どころ

展覧会「ファルマコン 連鎖／反応」には、日仏より国際的に活躍するアーティスト 11 名が作品を発表します。この展覧会のための新作、コロナ禍の生活をつうじて生まれた作品、あたかもこの世界状況を予見していたかのような 2019 年以前制作の作品が、京都のギャラリー・アトリエみつしまに一挙に集う、みごたえたっぷりの展覧会です。

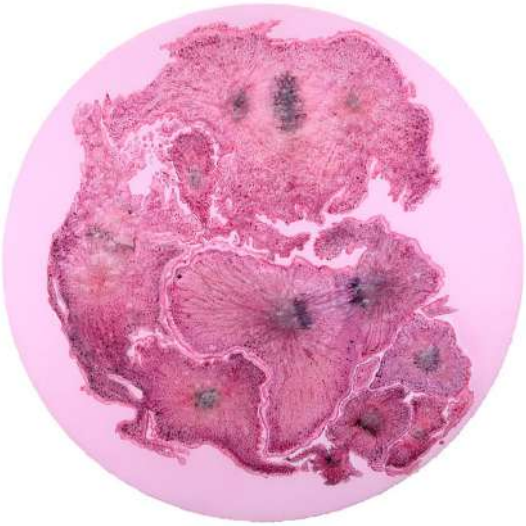
フランスからは、現状をシニカルなユーモアで表現するホルン奏者・ヌードモデルのエルイーズ・イルベール、暗室でご覧いただく注目の作品《chiasme》や巨大ドローイング《œ》を描いたフロリアン・ガデン、衛生概念をエコロジーの哲学で読み解くジェレミー・セガールが参加します。また、フランスを拠点に国際的に活躍しながら日本を見つめ直す古市牧子、命のメカニズムへの関心を独特な世界観で表現する福島陽子、そしてキュレータの大久保美紀が現状について再考します。

日本からは、消しゴムの消しカスから驚くべき細密彫刻を作り上げる入江早耶が必見の新作《青面金剛困籠奈ダスト》を発表します。また、磁性流体による彫刻で知られるメディアアーティストの児玉幸子が手がけたライトアート作品《雲の路》と色彩論の専門家・美術史家の加藤有希子による小説が共鳴します。気鋭の若手画家・谷原菜摘子がコロナ禍の生活を通じて描いたベルベット絵画《星を頂戴》とドローイング新作を発表、素材を探求し斬新な空間彫刻を試みてきた堀園実が新作の漆喰彫刻を発表します。

アーティストと作品について

フロリアン・ガデン／Florian Gadenne

1986 年生まれ、ナント美術大学大学院終了、パリ郊外在住美術家。2015 年、「PARIS ARTISTES」入選。2018 年、写真家松田有加里とのデュオ展「orbite elliptique」（滋賀、gallery サラ）。微生物叢と地球規模のミクロ・マクロの観点を行き来しながら、西欧中心的思考や人間の視点による偏ったエコロジーを批判し、アニミズムや錬金術の思想に影響を受けたコンセプトを展開する。新作の《oromitose》、《chiasme》および生命のダイアローグを描きこんだ巨大ドローイング《œ》を展示する。



《oromitose》 (2020, 40*40cm)

《chiasme》 (2020, 38*61cm)

「chiasme」は、網羅的に張り巡らされた神経細胞を撮影した電子顕微鏡写真から着想を得て制作された。世界の起源としての「卵」である受精卵が、無数の細胞群に分裂し、複雑な器官として分化する中で神経網

が形成される様子を思わせる。漆黒のキャンバスに蛍光絵具によって描かれており、暗室で光を放つ様子をご覧いただくことができる。

《œ》 (2019, 200*400cm)

《œ》は、DNA の二重螺旋構造を基盤に構成された生きた建造物であり、それ自身が異なる器官（ミクロオーガニズム、細胞内器官、ウイルス、バクテリアなど）によって構築されている。一見すると二元論的であるこの構造は、いわゆる「健全な」器官からなる上部、「病的な」器官からなる下部という二つの主部分によって構成されている。上部は、ブリューゲルの描くバベルの塔を着想源とし、＜良方＞へ向かっての上昇を表す一方、下部は、ボッティチェリが描いたダントの地獄を参照している。また、この＜良＞と＜悪＞という二元論的概念が入り混じる三つ目の部分、つまり上部下部構造が接触する境界面では、ファージのような食細胞、エキゾサイトーシス（分泌）、変性や突然変異といった異なる反応が見られる。病的器官はいわゆる「健全」なるものに刺激を与え、それらに何らかの変異をもたらす。《œ》を通じて、私たちは、恒常的に変化する生命の表現の、矛盾的で複雑なダイアローグを目の当たりにするだろう。

＊今回、ガデン自身によって制作されたポリフォニー音楽と共に、音響インスタレーションとして展示する。

古市牧子／Makiko Furuichi

1987 年生まれ、美術家。フランス・ナント美術大学院終了、ナント市を拠点に国際的に活躍。「ブドウの時代」（L'Âge de Raison、カナダ、2019）、「ドリーム・ジャングル」（アミラルホテル、宿泊室全体をインスタレーション、ナント）、「KAKI Kukeko」（ファルクフー）、「手のひら泥棒」（WISH LESS gallery、東京）など個展多数。洗練された水彩画のテクニックと色彩で、独特な植物や人物を描く。ユーモアとシニカルな要素が混ざり合う表現は、絵画、彫刻、テキスタイル（コラボ）、ビデオ、インスタレーションと幅広い。在仏日本人としての視線から、日本社会を批判的に考察する作品も発表している。

今回の展示では、《Mains》（手）と題された手を象った彫刻を出展する。私たちの手は、本来親密性を象徴するが、感染症予防の衛生強化で、洗浄・消毒の対象となっている現在の状況下では、人や物に触れる機会を奪われており、あるいは大変穢れた存在として消毒の対象となっている。また、新作のドローイングも発表する。アートを通じて、自由への問いかけを行う古市牧子の表現は、一見鮮やかで無邪気で生き生きと見えるものの、そこに内在する物事のグロテスクさや破壊的性質、滑稽さを見るものに感じさせる。

« Mains » (2020, 実物大)

堀園実／Sonomi Hori

1985 年生まれ、沖縄県立芸術大学大学院終了、彫刻家。2016 年、文化庁新栄芸術家海外研修制度によって、フランス・パリで研修滞在。主な展覧会に、「Emerging 2018 なみうちぎわの協和音」（トーキョーアーツアンドスペース本郷、東京、2018）や「ファルマコン–医療とエコロジーのアートによる芸術的感化」（ターミナル京都、CAS、京都・大阪、2017）など。身近なものや風景の構成要素を粘土で型取り、彫刻として再現する。それらは現実の似姿でありながらある種のズレを表現し、その余白にあるものや歪みについて思索する。金属や漆喰、石膏など多様な素材を用いた表現に取り組む。

本展覧会では、彼女の原点的素材の一つ、漆喰彫刻を展示する。コロナ禍の生活を通じて、当たり前だった日常生活や人との距離が変化し、人間の暮らしぶりそのものが変わってしまった状況を目の当たりにして、茨木のり子の詩「ひとり暮らし」の「喜怒哀楽の桶のなか　ごろごろと泥つき芋洗いのよう　犇めきあって暮らすのが一番自然な　人の生きかたなのかしら」というくだりを思い出した。波にさらわれてはぶつかり合って角が取れすっかりまるくなった海岸の石に想いを寄せ、どれも同じように見えるけれど全て異なる一つの石を漆喰で表現した作品《ごろごろとイモアラウ》を発表する。

エルイーズ・イルベール／Heloise Hilbert

音楽家・ヌードモデル・ドローイング作家。日本とは比べ物にならないコロナ感染者数と死者を出したフランスで「ソーシャル・ディスタンス」と同じくらい普及したコロナ禍の新用語・「ジェスト・バリエール」（防御のためのジェスチャー）をテーマとした風刺ドローイングシリーズを発表する。「ジェスト・バリエール」は今や社会の常識となり、すべての人にそれに基づいて行動するよう強いる。マスク着用、１メートル以上の距離、逐一の消毒とそのためのジェルを常に携帯。一体どこまでそのジェスチャーは適応されるべきなのだろうか。家族、恋人、友人との人間関係は変容しただろうか。一方で、感染を食い止めるために一般化した新たな習慣は、またしても人間のエゴイスティックな態度を露呈することになった。厳重な小分け包装に使う大量のプラスチック、道のいたるところに見られるようになった使い捨てマスク…。楽譜の裏紙に描かれたドローイングは連日 SNS に投稿されている。全てのドローイングに日本語訳付き。

Dessins (2020, A4, 《マスクをしているのになぜ罰金？》《ソーシャル・ディスタンスという名の不親切》)

ジェレミー・セガール／Jérémy Segard

1983 年生まれ、フランス・ナント美術大学大学院終了、ナント在住、美術家。ナント建築大学講師。ナント市大学病院（CHU）にてレジデンスを行う。医療とエコロジーの芸術的アプローチについて思考するアートアソシエーション LOTOKORO 主宰者。「衛生」の概念を主軸に据えた研究・実践活動を展開する。2014 年より、病院レジデンスを通じて、身体と環境のテーマに取り組む。緑化地区と衛生概念についての研究を展開し、最近は自ら購入した一区画を利用して実験的時制環境づくりを行う。

今回は、大学病院敷地内の滅菌施設での調査を通じて関心を持った、滅菌済みの医療用具をパッキングするについて 110 枚に及ぶドローイングを収録した《Où naissent les cadeaux?》（贈り物はどこで生まれる？）をはじめとする、「緑地」と「消毒」をテーマとした自身の研究に基づくインスタレーションを展示する。

谷原菜摘子／Natsuko Tanihara

1989 生まれ、画家。2015 年、絹谷幸二賞。2016 年、VOCA 奨励賞。2017 年、五島記念文化賞新人賞を受賞し、一年間フランス・パリで研修滞在。2018 年、京都市芸術新人賞受賞、同年東京・MEM にて個展「まつろわぬもの」開催。国際的に活躍中の若手画家として着目される。黒や赤のベルベットに油彩・アクリルなど精巧なテクニックで描き、リアリスティックな表現で人々の日常や社会に対して違和感を喚起し、ジェンダー、心理の闇、ある種の夜会的暴力などの主題について、しばしば画家自身がモデルと思われる人物をめぐる複雑なオーケストレーションを構成する。

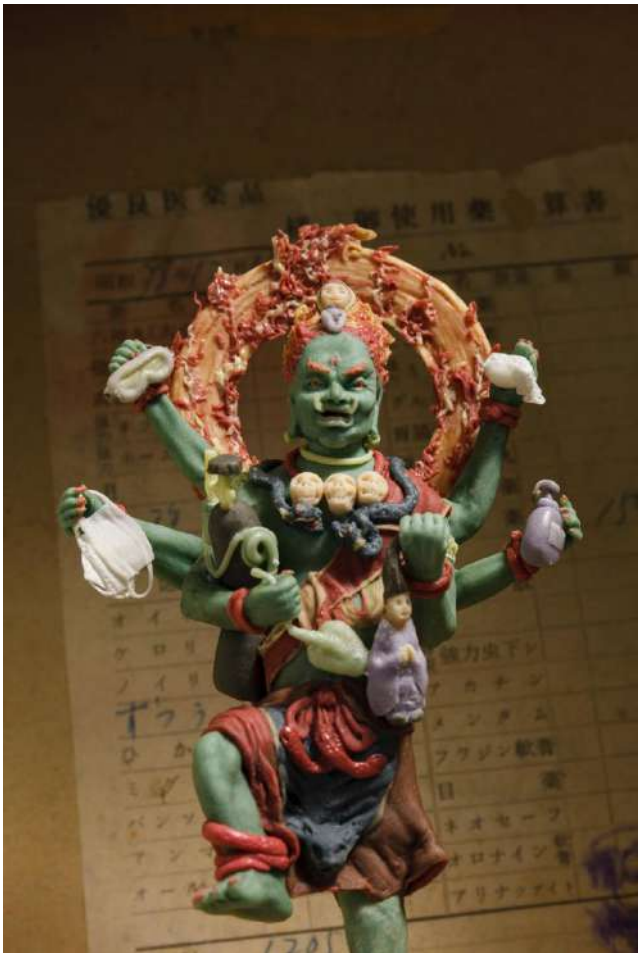
本展覧会では、新作 《星を頂戴》ほか、2020 年制作の数点のドローイングも発表する。《星を頂戴》は、外出自粛期間中にアトリエと自宅の往復を余儀なくされたコロナ禍の日々を通じて着想したイメージである。異化された日常が、毎日乗っていても見向きもしたことのなかった車窓や座席、車内の風景を一変させてしまった。一見見たことのあるような車内は目を凝らすと歪んでいて異世界と通じているようだ。非日常は、実は日常とひとつづきであることを意識させる。座席に腰掛ける一人の女は抱きかかえられた女の目を奪い、そこには闇に続く穴がぽっかり空いている。

《星を頂戴》（2020, 193cm*130cm）

入江早耶／Saya Irie

1983 年生まれ、広島市立大学大学院芸術学研究科博士課程修了。2009 年、岡本太郎現代芸術賞入選。2012 年、第六回 Shiseido egg 賞受賞。個展に「見出されたかたち」（2013、東京）、「入江沙耶展・純真遺跡〜愛のラビリンス〜」など多数。「瀬戸内国際芸術祭」をはじめ多くのグループ展に参加。消しゴムでイメージを消してできた消しカスを練り上げて彫像し、立体作品を作るという独特のアプローチを通じて、日常品やありふれたイメージの内包する意味や本質を洗い出し、現代的解釈をにおいて再現する。

本展覧会では、コロナ流行中の日常生活を通じて作家が関心を抱くこととなった疫病に関する研究の結果誕生した新作「青面金剛困籠奈ダスト」を発表する。疫病に関連する神々のうち、世間で著名になったアマビエは疫病を告げるものだが、元来疫病神として恐れられていた青面金剛明王は、のちの民間信仰において、その疫病神を祀ることを通じて病を防ぐための神に変化したという。悪から目を背けずに、それをむしろ受け入れて祀った人々へのオマージュである当作品は、私たちが現在直面している問題を乗り越えるための道しるべとなるだろう。現代版青面金剛明王の手には、マスクや石鹸や消毒ジェルが握られ、明王の足元の申（サル）たちも手袋やゴーグルを身につけている。とにかく驚くべき細部をご覧いただきたい。



《青面金剛困籠奈ダスト》(2020, h40*w25*d21cm)

加藤有希子×児玉幸子／Yukiko Kato×Sachiko Kodama

加藤有希子は、埼玉大学基盤教育研究センター准教授、作家。表象文化論、近現代美術史、色彩論研究者、単著に『新印象派主義のプラグマティズム』他。「現代社会における＜毒＞の重要性」研究メンバー。近年児玉幸子のアートについて研究し、目まぐるしく変貌するコロナ禍の世界を背景に、変わらない日常と突如突きつけられる非日常をアンティムに描いた短編小説「雲の路」に、児玉幸子の《雲の路》を登場させた。

児玉幸子は、日本を代表するメディアアーティスト、研究者、電気通信大学准教授。2000 年より、磁性流体という独自の媒体を通じて作品を発表してきた。新たなメディアアートの表現は国際的に注目を浴びている。第五回文化庁メディア芸術祭デジタルアートインタラクティブ部門で大賞を受賞（2002）。今回展示予定の「雲の路」は、窓のような枠組みの隙間からのぞく光の色が次々と変化するライトインスタレーションで、児玉のライトアート作品の中でも貴重な作品である。今回は加藤有希子の小説の抜粋と併せて展示する。

「窓の無い場所に、窓を作る」

“スリット窓シリーズ”でスリットを縦にすると、横にした時より強く“檻”のようなイメージが出てくる。

スリットの隙間から漏れる光は、空間的には外部につながっていないのにも関わらず、架空の異次元の空（そら）から格子の内側に漏れ出てきた光のように見えて、実際には誰も閉じ込められてはいないのに、いわば心の檻の内側から存在しない外部を切望しながら見ている・・そんな心境だった。

見えないウィルスの断片的な情報を確認し、オンラインで人と話すためにバーチャルとリアルを行ったり来たりする日常の中、元々抜けていた世界の底を、ゆっくり溶けていく視覚で彼方へと接続したかった。（児玉幸子）

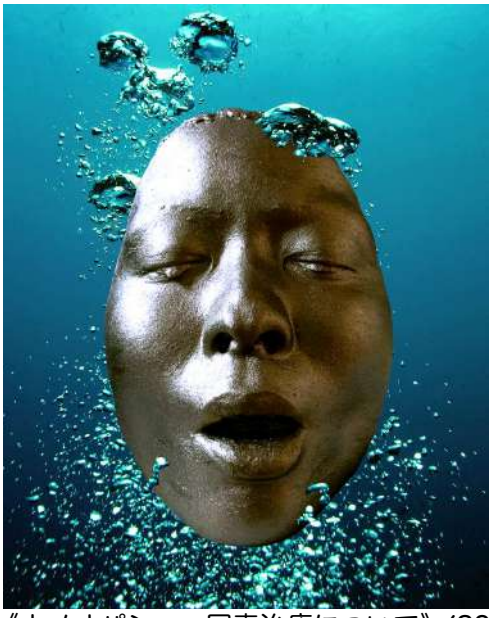
《雲の路》（2019, 70*57.5cm）

大久保美紀／Miki Okubo

1984 年生まれ、京都大学大学院人間環境学研究科で現代アートの研究中、パリ第８大学へ留学し、そこで芸術修士号・博士号を取得。2012 年以降パリ第８大学芸術学部講師。専門は美学・芸術学、とりわけ自己表象をする身体への関心から、2014 年より医療における身体感覚と芸術的アプローチの可能性に関心を持ち、キュレーション活動を開始する。キュレータとしての展覧会に、「ファルマコン：医療とエコロジーのアートによる芸術的感化」(2017)、「ファルマコン：アート・毒・身体の不協的調和(2018)、「ファルマコン：生命のダイアローグ」(2019)など。医療の文脈におかれた身体のあり方や、薬の副作用やプラセボ効果、ホメオパシーをはじめとする代替医療について関心を持つ。

本展覧会では 2019 年以前の作品から、現代医学的には効能の根拠がないとみなされている偽薬に関する問題を提起する《Candidats pour un placebo》 (プラセボ候補、2017)、私たちが日々服用する薬の副作用に焦点を当て、カプセルに望まれない効用を書き込む参加型のインスタレーション《Effets indésirables》（望まれない効果、2017）を展示する。そして、１９世紀のヨーロッパで研究・発展した代替医療であるホメオパシーは、「毒は毒を持って制す」という考えのもとで病や症状の原因となる物質を希釈して得たレメディーを用いるメソッドである。現代はプラセボ以上の効果がないとされながら、なお子ども医療や妊産婦医療に適用されている。ホメオパシーについての考察から代替医療そのものの存在意義や近代医療が抱える問題を問う「ホメオパシー：同毒治療について」を展示する。

《Candidats pour un placebo》(2017)



《ホメオパシー：同毒治療について》(2019)

福島陽子／Yoko Fukushima

1976 年生まれ、パリ在住。言語とは異なる多様なコミュニケーションのあり方に惹かれる。東洋医学や代替医療を通じてエネルギーの仕組みに関心を持ち、不可視の世界を読み解く鍵として、量子力学を表現手段の一つとして意識する。工芸、オートクチュール、ダンスなど、領域横断的表現を通じて、多様な素材を用いた繊細な作品によって独特の世界観を表してきた。
2005 年、サロン・ド・モンルージュのフランス代表若手アーティストにノミネートされる。2010 年、ヨーロピアンプログラム・アーティストレジデンス参加。2012 年、ケ・ブランリー博物館（パリ）における « New visions, anthropology, art and experimental film »のシンポジウムでビデオ作品が上映された。

本展覧会では、生と死・内と外・心と精神・光と闇など、世界を成り立たせる命のメカニズムを物質・非物質的観点から探求した一つの到達点として、三連砂時計《四次元を超えて》、そのコンセプトを描いたドローイング作品に加えて、オブジェとドローイングを中心とした数点を発表する。

《Beyond the 4th dimension》(2020)

《Cosmic Egg (Devine comedy)》(2020)

イベントへお越しください！

＊<u>オープニングパーティ：12 月 8 日　16 時～20 時</u>
出品作家数名と主催者・吉岡洋が在廊し、ささやかなオープニングパーティを行います。どなたでもご参加いただけます。どうぞお越しください。

＊<u>シンポジウム：12 月 19 日　14 時～18 時</u>
シンポジウム「ファルマコン　連鎖／反応　をめぐって」（仮題）
吉岡洋・加藤有希子・小澤京子・大久保美紀によるレクチャーがあります。